

〈研究資料〉

## 小中学生向けストリートダンス大会の表現重視傾向の考察

— 「全日本小中学生ダンスコンクール」に関する新聞記事の計量テキスト分析を用いて—

根岸 良和 (東京都立荻窪高等学校 (放送大学大学院))

### A Study of the Increasing Emphasis on Expression in Street Dance Competitions for Elementary and Junior High School Students :

Using a quantitative text analysis of newspaper articles about the  
“All Japan Elementary and Junior High School Students Dance Competition”

Yoshikazu Negishi (Tokyo Metropolitan Ogikubo High School (The Open University of Japan Graduate School) )

#### Abstract

“Contemporary rhythmic dance” competitions for elementary, junior high, and high school students being launched in 2012 and 2013. In recent years, dances with specific meanings, such as the Bubbly Dance, have been featured in “contemporary rhythmic dance” competitions. In this study, through a quantitative text analysis of newspaper articles about the “All Japan Elementary and Junior High School Dance Competition”, on the reporting side, it was evident that the role of leaders was being downplayed in favor of spotlighting participants who were not leaders. Further, we found that both newspaper reporters and participants recognized the importance of the competition’s “theme” and intentionally incorporated “expressions” and “facial expressions” into their works, keeping the theme in mind. This is reflected in an increase in the number of “expression source” codes in participant interviews in the newspaper articles. While technique was considered by those judging, “heart,” “feeling,” and “expression,” in reference to the theme, also became prevalent as important points in the dance. As a result of the above points, we were therefore able to notice an increasing emphasis on expression in the street dance competitions for elementary and junior high school students.

**Keywords:** compulsory dance, extracurricular activities, quantitative text analysis,  
contemporary rhythmic dance

#### はじめに

2012年の学習指導要領改訂により、中学校と高等学校において武道・ダンスが保健体育で必修となった。ダンスは3領域で構成されるが、特に「現代的なリズムのダンス」についてマスコミに大きく取り上げられ、2012年と2013年に小学生・中学生・高校生向けの「現代的なリズムのダンス」のコンクールが相次いでスタートした。それぞれの大会の主催は主に新聞社とストリートダンスを扱う企業が行い、その様子は新聞やテレビでも取り上げられてきた。なお、ストリートダンスを扱う企業とは、教員向けリズムダンス研修会、学校への出張リズムダンス授業、教員・キッズ向けのダンス映像配信などを主に行うような2012年前後に誕

生した各企業のことを指す。近年、「現代的なリズムのダンス」のコンクールにおいて、バブリーダンスのように、踊りを通してテーマを伝える作品も大きく取り上げられるようになってきた。本研究では、コンクールの一つである「全日本小中学生ダンスコンクール」に関する新聞記事の計量テキスト分析を通して、大会の傾向がいかに変化してきたかを捉え、今後の学校教育におけるダンスの方向性を考える一助とする。

## 1 先行研究の検討と本研究の目的

2012年のダンス必修化の前にマスコミが一斉に「現代的なリズムのダンス」について取り上げた。また、同時期のダンス必修化についての論文でも新聞記事の引用が多く用いられた（有國，2018：48-51）。これらの新聞記事は、ダンス必修化に慌てる教員の姿をインタビュー記事に即して捉えているものであり、教育関係者以外にもダンス必修化に対応する教員の姿にクローズアップした情報は広く伝えられた。しかし、学校教育におけるダンスに関する新聞記事の検討において、テキストを統計的な方法で分析した論文は未だに表れていない。さらに、2012年にダンス必修化と学校（主に教員）との関係を論じた論文は複数現れているが、現代的なリズムのダンスのメディアによる扱いに関して、新聞記事を統計的な方法で分析した論文は管見の限りでは皆無に近い。

本研究では、2012年のダンス必修化以降、小中学生が行うダンスが、マスメディアにおいてどのように取り扱われ、また、その扱われ方がどのように変化してきたのかについて、新聞記事上における単語の分布に注目して、長期的な趨勢を計量的に明らかにしたい。そのために、2012年から現在に続く学校教育におけるダンスを結ぶものとして、学生対象のダンスコンクールに注目し、さらにそれを継続的に取り扱う新聞記事を広く取り上げた上でテキスト分析を行っていく。

## 2 「全日本小中学生ダンスコンクール」について

2012年に開始されたコンクールについては複数あり、その代表的なものとして、「全日本小中学生ダンスコンクール（朝日新聞社主催）」、「日本高校・中学校ダンス部選手権（産経新聞社・フジテレビ主催）」、「全国小中学校リズムダンスふれあいコンクール（毎日新聞社・スポニチ共催）」などが挙げられる。これらのコンクールに取り組む選手の様子はドキュメンタリーとしてマスコミにも取り上げられ、テレビ放映、中にはその取材の様子を書籍化しているものもある（中西，2020）。学生対象のコンクールの1つである「全日本小中学生ダンスコンクール」については大会ホームページによると、「5人以上40人程度の小中学生のチーム」を対象に、「小中学校の教育課程に採り入れられたダンス（リズムダンス）を通じて、子どもたちの健やかな体づくりと、友だちと気持ちを一つにがんばる姿を応援する大会」として2013年からスタートした大会であることが把握できる。本研究では、継続的に資料を参照できる大会として「全日本小中学生ダンスコンクール」を取り上げていく。なぜ、多くのコンクールの中から本大会を選んだかについては、次節の新聞選定の理由の際に説明することとする。

本コンクールの審査基準については、大会公式ホームページや参加要項に載っており、その基準は2013年の第1回大会から変更されていない（表1）。演技は作品点、技能力、表現力、チーム力、印象点の5項目で審査される。それら5項目は複数の審査員によって採点され、項目ごとに審査員全体の平均点が出される。その合計点の上位から金賞、銀賞、銅賞を決定するというよう手順を踏む。さらに、要項には「チームで振り合わせて踊る『ユニゾン』を、合計45秒以上入れてください」とあり、その後に「出場者全員で気持

ちをあわせて踊ることに重きを置いたルールです。狭義のユニゾンに限らずシンメトリーやカノンも該当します。上記に違反した場合は、審査項目『作品点』が零点となります。」と補足されている。

表1 コンクールの審査基準 (2023年の参加要項より抜粋)

審査基準	評価ポイント例
作品点	タイトル(テーマ)と選曲、振り付け、構成が合っているか、独創性があるか
技能力	音楽の特徴をとらえ、リズムに乗って全身で踊れているか
表現力	タイトル(テーマ)に沿って気持ちを込めた表現が出来ているか
チーム力	動きを合わせたり、ずらしたり、対立したり、チームで息を合わせて踊れているか
印象点	総合的にチーム全体から伝わる印象

### 3 研究方法

本章では分析対象データとしてなるべく広く普及している新聞を扱うことを考え、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞を検討した。その中で、予選の様子から取材をしている大会を対象としたいため、三社が主催するダンスコンクールを検討したところ、朝日新聞の「全日本小中学生ダンスコンクール」と毎日新聞の「全国小・中学校リズムダンスふれあいコンクール」が挙げられた。さらに、2つのコンクールを比較すると、「全国小・中学校リズムダンスふれあいコンクール」は中学生ダンス部部門以外の衣装が決まっていることや、中学生ダンス部部門も課題曲と自由曲に分かれていることから、単純に大会自体の作品の個性を見るには、より自由度の高いコンクールが調査に適していると考え、今回は現代的なリズムのダンス(ヒップホップ、ロック、ジャズ、サンバなど)が対象ということ以外に選曲と衣装に制限がなく(わいせつな表現や攻撃的な内容は除く)、自由曲のみの朝日新聞主催「全日本小中学生ダンスコンクール」を対象とした。したがって、主催の新聞社である朝日新聞の『朝日新聞クロスサーチ』を利用する。『朝日新聞クロスサーチ』は出処を明らかにすることにより学術研究にて引用することを認められている。

2013年から2023年までの「全日本小中学生ダンスコンクール」を検索してヒットする記事数は663件であった。記事を分類すると、大会の受賞校の情報のみを扱っている記事、大会の受賞校の情報と参加者の感想を扱っている記事、参加校の練習の様子を取材する記事、審査員のコメントを扱っている記事、大会の予告に関する記事の5種類に分けられる。本研究では、大会の傾向がいかに変化してきたかを捉えることが主眼である。したがって、単なる情報は極力排除し、参加者及び審査員のコメント、作品の記事での扱われ方を分析した。具体的に扱うテキストは次の3種類である。大会の受賞校の情報と参加者の感想を扱っている記事の参加者の感想の部分のみを切り取ったもの、参加校の練習の様子を取材する記事、審査員のコメントを扱っている記事である。663件を手作業で切り取り作業を行った後に残った記事は437件であった。なお、この作業で2020年の記事1件(コロナ感染症のため大会中止)と本調査時点での2023年の記事2件は地方大会の受賞校の情報のみであったため、実質取り扱う記事は2013年から2022年の記事のうち、2020年を除いたものとなる。「全日本小中学生ダンスコンクール」に関する新聞記事の内容を分析する最初の段階として、分析対象として得られたのはどのような記事群かという全体像をつかむため、KH Coderを用いて言葉を自動的に取り出した(樋口, 2014)。まず、大会の審査の変化を追うために、新聞記事及び大会公式ホームページ、大会公式SNSより審査員の属性の変化を追う。その後、多く出現した言葉による経年比較をするために、頻出語の抽出をし、年度比較を視覚的にしやすくするために2次元の散布図を通じた対応分析を用いる。そこから、さらに性質の近いものをまとめて傾向変化を見やすくするために、自己組織化マップによるコーディングをし、特徴的な性質のみをグラフを用いて比較していく。

## 4 研究の結果

### 4.1 審査員の属性の変化

「全日本小中学生ダンスコンクール」は年ごとに審査員を明らかにした上で募集をかけており、過去の新聞記事からも審査員を把握することができる。新聞記事及び大会公式ホームページ、大会公式SNSからデータを収集し、2013年から2023年の審査員についてまとめた（表2）。この変遷を見ていくと、「振付家・ダンサー」枠、「ダンス関係の団体の運営」枠、「教育関係者」枠の3つに大別される。そして、その中の「教育関係者」枠をより細かく見ていくと、大会発足当初は教育学の教授や学習塾代表など、直接はダンスと関わりがないが、大会参加対象の小中学生の教育に精通している人物が審査員になっており、2015年以降からダンスの専門である舞踊教育学の大学関係者が審査員になっている。総じて、大枠の3つの属性は共通しているが、「教育関係者」の分野が途中から変化していることがわかる。

表2 コンクール審査員（属性）の変遷

年	審査員の属性
2013	振付家・ダンサー、振付家・ダンススクール代表、プロダンサー、ダンスカンパニー代表、学習塾代表、大学教授（教育学）
2014	振付家・ダンサー、振付家・ダンススクール代表、振付師・プロダンサー、ダンスカンパニー代表、学習塾代表
2015	振付家・ダンサー、振付師、プロダンサー、ジャズダンス講師、大学准教授（舞踊教育学）
2016	振付家・ダンススクール代表、プロダンサー、ダンスカンパニー代表、大学准教授（舞踊教育学）
2017	振付家・ダンサー、プロダンサー、ダンスカンパニー代表、大学准教授（舞踊教育学）
2018	振付家・ダンサー、振付師、プロダンサー、ジャズダンス講師、大学准教授（舞踊教育学）
2019	振付家・ダンサー、振付家・ダンススクール代表、振付家・ダンサー、大学准教授（舞踊教育学）
2020	コロナ感染症拡大のため大会中止
2021	振付家・ダンサー、振付家、プロダンサー、振付家・ダンサー、大学准教授（舞踊教育学）
2022	振付家・ダンサー、振付家、プロダンサー、振付家・ダンサー、大学准教授（舞踊教育学）
2023	振付家・ダンサー、振付家、プロダンサー、振付家・ダンサー、大学准教授（舞踊教育学）

### 4.2 それぞれの年に特徴的な言葉

「全日本小中学生ダンスコンクール」の頻出語の経年比較をするために、各年において、特に多く出現している言葉を見ていく。その際に、KH Coderの機能を使用し、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、感動詞を除き、頻出語を抽出した。そして、それぞれの語と年の関連を表すJaccardの類似性測度を用いて、各年に特徴的な語を上位10位ずつリストアップした（表3）。その結果、前半の2014年、2015年、2016年にわたり、「リーダー」が頻出語の上位2位以内にあったが、2019年以降上位10位以内には入ってきていない。また、「表現」については、2014年に5位に入った後、2016年～2018年の3年間は10位以内には入らなかったが、2018年以降2022年まで常に上位10位以内に入っている。

さらに、各年の特徴を探る方法として2次元の散布図を通じた対応分析を用いた。各年と頻出語の対応分析を行い、抽出された最初の2つの成分による同時配置で描かれたのが図1である。なお、原点近くに頻出語が集まっていたため、原点近くをクローズアップして表現している（図1）。

表3 開催年ごとの頻出語

2013		2014		2015		2016		2017	
新聞記事数	26	新聞記事数	48	新聞記事数	49	新聞記事数	76	新聞記事数	61
文字数	8070	文字数	11006	文字数	13310	文字数	17910	文字数	13828
ダンス	.113	リーダー	.067	リーダー	.106	女子	.088	ダンス	.096
審査	.107	動き	.052	披露	.054	リーダー	.082	笑顔	.063
チーム	.094	大会	.046	曲	.053	笑顔	.072	披露	.060
小中学生	.064	衣装	.045	動き	.050	大会	.064	女子	.059
出場	.056	表現	.045	練習	.048	チーム	.060	衣装	.058
コンクール	.055	振り付け	.045	ステップ	.046	練習	.057	登場	.054
大会	.054	ヒップホップ	.043	登場	.044	全国	.049	練習	.051
東京	.054	キレ	.037	テーマ	.040	演技	.048	チーム	.050
中学生	.048	演技	.034	体	.039	ヒップホップ	.047	動き	.047
8月	.048	観客	.034	演技	.037	会場	.046	テーマ	.045

2018		2019		2021		2022	
新聞記事数	70	新聞記事数	63	新聞記事数	15	新聞記事数	28
文字数	14491	文字数	14249	文字数	2790	文字数	5525
ダンス	.114	大会	.066	パンツ	.057	登場	.055
披露	.081	女子	.064	変化	.050	女子	.054
リーダー	.070	笑顔	.058	登場	.048	振り付け	.050
女子	.068	男女	.057	自分	.044	男女	.049
笑顔	.066	全国	.057	演技	.041	表現	.049
表現	.062	表現	.052	音楽	.040	披露	.048
男女	.055	動き	.044	表現	.039	衣装	.046
ヒップホップ	.047	出場	.043	最後	.038	会場	.042
テーマ	.043	衣装	.043	息	.036	身	.039
参加	.038	踊り	.041	中学	.032	最後	.039

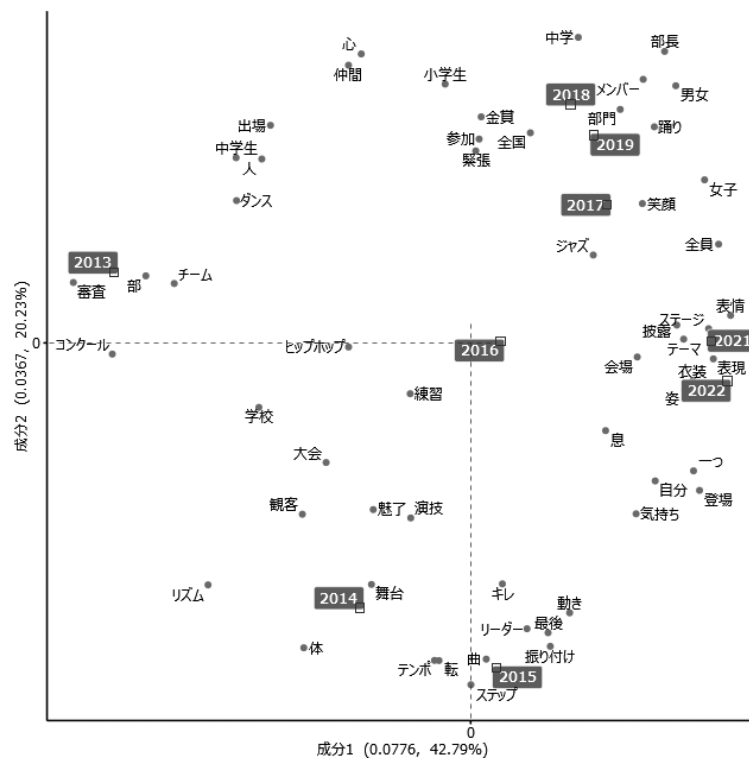


図1 各年と頻出語の対応分析

図1をみると、2013年、2014年、2015年の大会発足から前半3年間の特徴語に対する分布が年ごとに大きく異なり、2016年以降は小さなブレを経ながら2021年と2022年に収束していく様子が見られた。原点から見た方向と年度を照らし合わせた結果、特徴的な単語を特定できる。その視点で見ると、原点から見て左方向の2013年を特徴づけている語は「審査」、原点から見て左下方向の2014年を特徴づけている語は「体」「リズム」、原点から見て下方向の2015年を特徴づけている語は「ステップ」、原点から見て右上方向に2017年、2018年、2019年がプロットされており、それらを特徴づけている語は「部長」、「メンバー」、「男女」である。そして、原点から見て右方向の2021年と2022年の位置はほとんど一致しており、それらを特徴づけている語は「表現」「表情」「テーマ」である。また、2015年から2016年の間に「キレ」「動き」などの振り付けの踊り方自体の単語があり、2016年から2017年に向かう途中で「ヒップホップ」「ジャズ」という具体的なストリートダンスのジャンルの名称が配置されていた。初めの開催の2013年と2017年、2018年、2019年の群の間には「心」「仲間」の頻出語が表れている。

#### 4. 3 自己組織化マップによるクラスター分析

新聞記事の内容からコーディングをしていく前段階として、データ中に数多く出現していた言葉を用いて、出現パターンの似通った言葉ほど近くに布置されるような言葉のマップを作製した。この言葉のマップは自己組織化マップと呼ばれ、いかなる言葉が新聞記事のテキストの中に多く見られたのかということを確認することができる。また、近くに布置されている言葉の組み合わせを見ることで、いかなる言葉が似通った文脈で使われていたのかを読みとることができる。図2を作成するにあたっては、KH Coderを用いてテキスト型データを統計システムで扱える形に整理し、統計システム上で自己組織化マップの作成を行った（図2）。作成にあたっては、語の最小出現数を40回とし、布置される語の数を73語に絞った。それぞれのクラスターをみていくと、右中央の「会場」「観客」「魅了」に類似性が認められる。また、上部の「リーダー」「一つ」「メンバー」「人」などの人間関係を表す語の広がりが見られる。そして、右下に集中している「キレ」「テンポ」などの身体の技術関連が集まっており、右上の「気持ち」から下にかけて、「心」、「表情」と連なる。

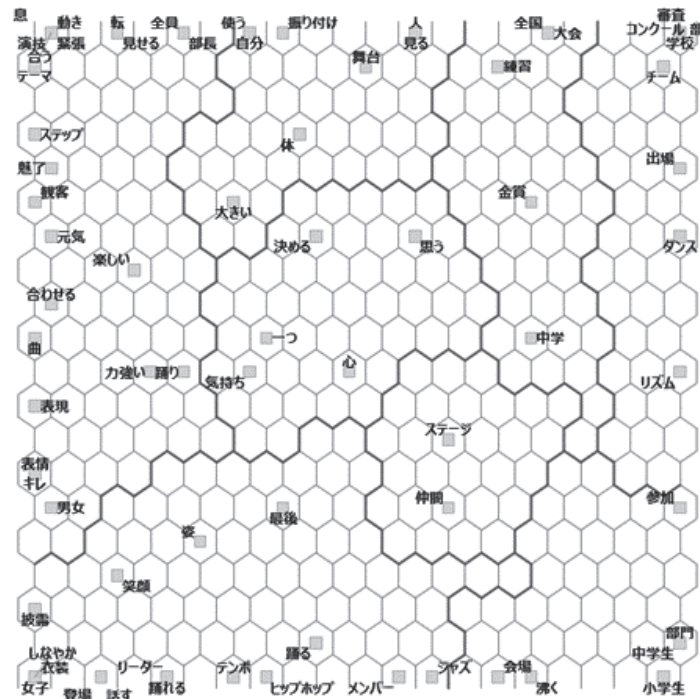


図2 頻出語73語の自己組織化マップ

#### 4. 4 年度ごとのコーディングの比較

前節の自己組織化マップによって発見されたデータ中の主題群を用いつつ、マップの区切りが一致していなくとも分類として近いものは同じコードを付した (表4)。

KH Coderを用いて実際のコーディングを行い、年ごとに、それぞれのコードの出現率を集計し、経年比較を行う。各年について、各コードが与えられた文の割合 (パーセント) を集計した結果をバブルプロットの形で表現したものが図3である (図3)。コードが他の年度に比べて出現率が多ければ色が濃くなり、純粋な出現率の高さは正方形の大きさに比例する。これを見ていくと、どの年においても「人間関係」のコードの出現率が高いことがわかる。「観客」のコードは緩やかな出現率の増加が読み取れ、「楽しむ心」のコードはやや波があるが安定していることがわかる。

表4 コーディングルール対応表

コード名	抽出するルール
観客	会場 or お客さん or 観客 or ステージ or 披露 or 魅了
楽しむ心	笑顔 or 元気
人間関係	自分 or 部長 or リーダー or 仲間 or 全員 or メンバー or 一つ
技術	キレ or 動き or ステップ or テンポ or 体
表現源	心 or 表現 or 気持ち or 表情

本研究では、特に大会の傾向がいかに変化してきたかを捉えたいため、2013年と2022年でコード出現率を表すバブルプロットの正方形の大きさの差が大きい「表現源」のコードをピックアップする。さらに、「表現源」と対比されることの多い「技術」と「人間関係」のコードも合わせて、年ごとの出現率を折れ線グラフで作成した。縦軸の単位はパーセントで、各コードが含まれる文を文単位の総数で割った数を表している (図4)。

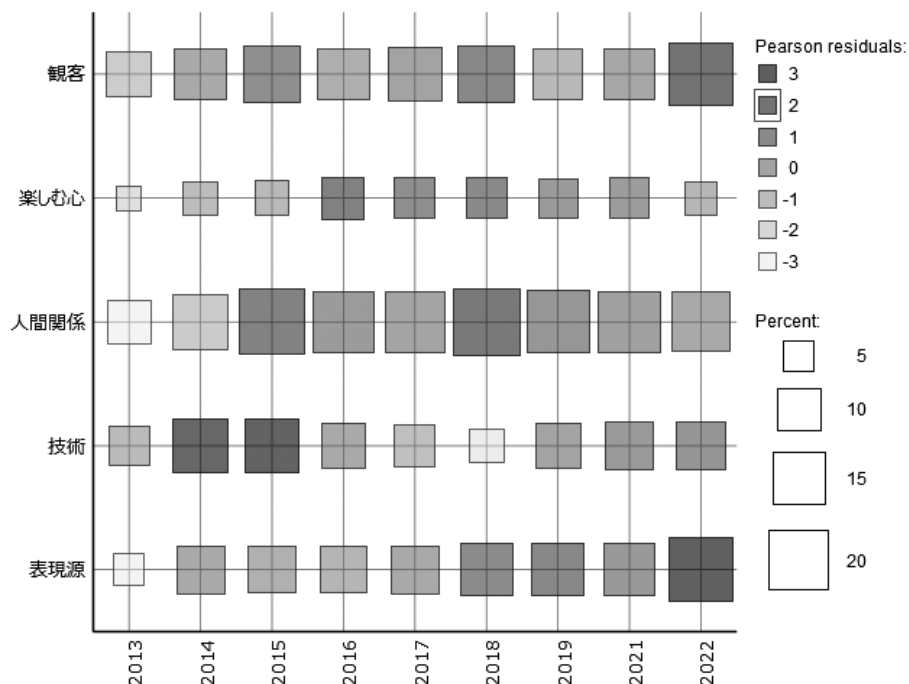


図3 コード出現率のバブルプロット

グラフを見てみると、「表現源」のコードの線は年を追うごとに増加していく右上がりの直線に近く、「技術」のコードの出現率は一度増加するが、その後減少し、変動が激しい不安定な経過をたどっている。これら、二つの線は2016年の時点で逆転しており、それ以前は「技術」のコードの出現率が優位、それ以降は「表現源」のコードの出現率が優位となっている。また、常にバブルプロットでも大きい正方形であった出現率の高い「人間関係」の折れ線グラフを見ると、2015年まで上昇し、その後は高い出現率のままキープしている。しかし、2022年の時点で、「表現源」の出現率が「人間関係」の出現率を超えていることが分かる。2013年から2014年の上昇の角度は「人間関係」と「技術」は同程度だが、その後「技術」の出現率が安定しなかったのに対し、「人間関係」は高い水準を保っていた。



図4 「技術」と「表現源」と「人間関係」の経年比較

## 5 考察

本研究では、初めに「全日本小中学生ダンスコンクール」の新聞記事の頻出語の経年比較を行った。その結果、大会発足後三年間の頻出語には「リーダー」が目立っていた。新聞記事の「リーダー」が含まれる前後24語の部分を見てみると、すべてのパターンに「(団体名)は〇〇のような演技をした。リーダーの〇〇さんは…」という形式が認められた。2019年以降もインタビュー形式の記事は続くが、リーダーの文言は完全に消えており、取材側のリーダーを強調しない姿勢や、リーダーではない参加者にもスポットを当てる姿勢が反映したものと考えられる。

また、各年と頻出語の対応分析によって、「テーマ」「表情」の頻出語が2021年、2022年に増加している様子が読み取れた。「テーマ」を含む新聞記事を見てみると、「〇〇というテーマで踊った」というものがほとんどで、記者側が扱う内容に「テーマ」を加えることが多くなったことが考えられ、このことは大会に出される作品自体がテーマを扱うものが多くなり、取り上げることが有効になったためと考えられる。「表情」を含む新聞記事では、「観客に楽しさを伝えるにはどうしたらいいかを常に考え、明るい表情になるように気を配った」(2022年10月3日)や「『踊りに気持ちをのせて伝えて』と表情や目線に関する指導もした」



(2017年8月15日) などのように、記者側の注目点というよりも、参加者のインタビューの中で、意図的に作中の「表情」を意識していることが明らかになったことを示している。テーマを扱う作品が多くなったことで、表情の重要性も高まったと考えられる。また、2013年と2017年、2018年、2019年の群の間には「心」「仲間」の頻出語が表れている点については、2013年の新聞記事の「ダンスで仲間とひとつに——。8月に東京で初めて開催する『全日本小中学生ダンスコンクール』の参加チームの募集が始まった」(2013年3月6日)というキャッチフレーズから来ていることと捉えられ、そのフレーズが2017年、2018年、2019年に再び意識されたということも分かる。このことが、次のコードの部分で触れる「人間関係」が常に頻出語の上位にあったことと関係していると考えられる。

5種類のコードを用いての経年比較では、「表現源」のコードの線は年を追うごとに増加していく右上がりの直線に近く、「技術」のコードと2016年に交わり、「人間関係」のコードと2022年に順位の交代が見られた。2013年の「技術」のコードを構成している頻出語「キレ」を含む新聞記事を見てみると、「学校のクラスやクラブ活動、地域のダンススクールなどで編成した仲間と、息のあったキレのあるダンスを披露し、約2千人収容の会場は拍手と歓声に包まれた。両部門ともに最優秀の金賞は9チームが受賞。銀賞は19、銅賞は12チームに贈られた」(2013年9月20日)とあり、息が合うこととキレがあることを評価の高いものとし、テーマよりもユニゾンダンスをクローズアップしていることが読み取れる。また、「人間関係」のコードを構成している頻出語「一つ」を含む新聞記事を見てみると、「いろいろな学年が参加するなど、たくさんの個性が集まっています。『みんなで助け合って一つの踊りを完成させてほしい』という願いもこめました」(2013年8月26日)、「小学校に通う2～6年生の女の子21人のチームで、週に1回、町内の体育館で練習しています。ちがう学年の子同士で肩もみをしたり、ちょこちょこをしたりと、学年の壁をこえ仲がいいです。『ダンスでみんながひとつになっていく感じが好き』」(2013年8月26日)など、ダンスづくりの過程で協力することやチームを意識することが常に大会を支えるテーマとして根付き、その部分を記者もクローズアップして記事にしていることが分かる。それに対して、「表現源」のコードを構成している「心」「表現」「気持ち」を複数含む新聞記事を見てみると、「独創的な振り付けで揺れ動く心の葛藤を表現した」(2022年8月13日)や「チームで振りを合わせて踊るチーム力や、表情などの表現力が審査対象の基準の一つになります」(2019年11月4日)など、ダンスを踊るために必要なものとして、これらの要素を意識していることが分かる。また、第1回大会より審査基準として「表現」がはっきり明示されていることから、「表現源」の増加は審査基準の変化ではなく審査員の属性の変化にも関係しているとも考えられる。2章でも確認したように、「表現源」が「技術」を抜いた1年前の2015年から、大会参加対象の小中学生の教育に精通している人物からダンスの専門である舞踊教育学の大学関係者に審査員が変わっていることも要因の一つになっていると考えられる。

以上、「全日本小中学生ダンスコンクール」に関する新聞記事の傾向の変化を複数読み取ることができた。以下の2つの点についてまとめ、そのまとめから小中学生が行うダンスがマスメディアにおいてどのように取り扱われ、また、その扱われ方がどのように変化してきたのかについて考察していく。1点目として、取材側のリーダーを強調しない姿勢や、リーダーではない参加者にもスポットを当てる姿勢を読み取ることができた。近年、サーバントリーダーという新しいリーダーの形が提唱されるようになってきた。グループワークをより効果的に展開するためのサーバントリーダーシップの習得に関して考察した三浦は「状況に応じて、その場に適する様態のリーダーシップを選択し、その都度、適任者が担当すべきだとの考え方も登場している。このようにリーダーシップの捉え方が大きく変わったのである」と述べ、さらにサーバントリーダーについて「メンバーの理解を取り付け、その意欲を高めることがグループ目標の達成には不可欠」とし、グループ目標の達成に必要なものとしている(三浦, 2023: 1-6)。ダンスに対するマスコミの取り上げ方も、リーダーが一方向的にダンスの振り付けを教え込むのではなく、グループメンバー相互の建設的な意思

疎通・合意形成を強調する傾向に変化してきたといえる。2点目として、「テーマ」を意識したうえで意図的に「表現」や「表情」を作品中に取り込んでいる様子が記事から読み取れた。この変化については、審査員の属性の変化も一つの要因ではあるが、ダンスを技能に帰結するのではなく、「表現源」のコードを構成している「心」「表現」「気持ち」も大切な要素であることをマスメディアも意識していることが分かる。今回の調査で検討した新聞記事ではダンスの審査結果や参加者の感想だけでなく、指導者や審査員の思いも反映されていた。2015年の新聞記事の審査員のコメントでは「学校参加の場合、技術を伸ばすことだけが目標ではないと思います。子どもたち一人ひとりの個性を生かし、みんなで協力して創り上げる過程こそが大切。それを発表・評価できる場であってほしい」（2015年10月10日）とあり、また、2016年の新聞記事の審査員のコメントでは、「背の高い人から教わったダンスを背の低い人が踊れば必然的に形は変わる。体の柔らかさも違う。そうしたことをきっかけに、自分に合った表現法を見つけ出す。その個性をチームで組み合わせる」（2016年10月10日）といったような協調学習によるダンス創作をイメージした文言が見られた。こういった審査員の創作過程について言及した内容も報じられることで、マスメディアの受け手である読者の表現に関する理解に資するといえる。結果、小中学生が行うダンスはマスメディアにおいて、協調学習による創作の側面を描かれるようになっていったといえる。

## 6 結論

本研究では、「全日本小中学生ダンスコンクール」に関する新聞記事の計量テキスト分析を通して、大会の傾向がいかに変化してきたかを捉えようと試みた。その結果、取材側のリーダーを強調しない姿勢や、リーダーではない参加者にもスポットを当てる姿勢を読み取ることができた。また、新聞記者・参加者ともに大会における「テーマ」の重要性を認識し、「テーマ」を意識したうえで意図的に「表現」や「表情」を作品中に取り込んでいることが分かった。それらは新聞記事の参加者インタビューの「表情源」コードの増加に反映されており、ダンスを踊る上で、技術も審査対象として意識されつつも、「テーマ」を「表現」するための「心」「気持ち」「表情」も重要なポイントとして浸透しており、小中学生向けストリートダンス大会の表現重視傾向を読み取ることができた。

以上のことから、小中学生が行うダンスはマスメディアにおいて、リーダーが一方向的にダンスの振り付けを教え込むのではなく、グループメンバー相互の建設的な意思疎通・合意形成を強調される傾向を持ち、協調学習による創作の側面を描かれるようになっていったことが明らかになった。

## 7 今後の課題

本研究では、新聞記事の計量テキスト分析から大会の傾向変化を読み取ろうと試みたが、やはり新聞記事では参加者の意図や新聞記者の強調している部分以外の部分もテキストとして含まれてしまうため、純粹に比較したい要素が抽出できなかった。また、実際に参加者としてどう感じているかを知るには新聞記事だけではならず、実際のインタビューなどで補強する必要がある。対象についても今回は小中学生対象であったが、高校生のコンクールではどうか、小中学生の他の大会ではどうかなどの比較もする必要がある。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、温かいご助言をいただきました放送大学教授橋本鉦市先生、名古屋大学准教授丸山和昭先生に深くお礼申し上げます。また、最後まで丁寧かつ的確なご指導をいただきました査読者・編集者の皆様、英文抄録の作成にご協力いただきました Kevin John O'Leary 氏に深謝の意を表します。

## 引用・参考文献

- 1) 朝日新聞社, 『朝日新聞』  
2013.3.6, 「参加チーム募集始まる 全日本小中学生ダンスコンクール イベント Asahi」, 朝刊 23 面  
2013.8.26, 「本番へ We just go! 27 日開幕 全日本小中学生ダンスコンクール」, デジ専  
2013.9.20, 「みなぎる気迫、沸き立つ 第 1 回全日本小中学生ダンスコンクール」, 朝刊 33 面  
2015.10.10, 「元気に、クールに 第 3 回全日本小中学生ダンスコンクール」, 朝刊 33 面  
2016.10.10, 「私らしく、自由に、弾む 第 4 回全日本小中学生ダンスコンクール」, 朝刊 36 面  
2017.8.15, 「息ピタリ、本番へ気合 小中学生ダンスコン、あす九州大会」, 福岡, 朝刊 19 面  
2019.11.4, 「楽しさ、全開 第 7 回全日本小中学生ダンスコンクール」, 朝刊 16 面  
2022.8.13, 「小学 3 チームが全国大会出場へ ダンスコン東日本」, 東京, 朝刊 27 面  
2022.10.3, 「京都文教中が銀 全日本小中ダンスコン」, 京都, 朝刊 25 面
- 2) 有國明弘, 2018, 「ストリートダンスの日本における展開: ダンス必修化をめぐる国内の動向に注目して」, 『市大社会学』, 15: 39-59.
- 3) 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析』, ナカニシヤ出版: 京都
- 4) 三浦真琴, 2023, 「Active Learning の理論と実践に関する一考察: LA を活用した授業実践報告」, 『関西大学高等教育研究』, 14: 1-6
- 5) 中西朋, 2020, 『高校ダンス部のチームビルディング』, 星海社: 東京

